

アッシリヤの脅威に屈しなかったヒゼキヤ

「イザヤ書」からの説教 (No.5)

【聖書箇所】 36章1節～39章7節



【主要聖句】

30章15節「神である主、イスラエルの聖なる方は、こう仰せられる。

『立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。』』

ベレーシート



●預言者イザヤが活躍した時代はアッシリヤという国がその勢力を伸ばして中近東の覇権を握った時代でした。そうした時代状況の中で、ユダの王であったヒゼキヤがいかにもその危機から救い出されたのか、その記録が聖書に記されています。歴史は神の啓示の舞台です。しかもその歴史とはイスラエルの歴史です。その歴史の中で起こった出来事の中に、また、歴史の中で預言者を通して語られた神のことばの中に、神がいかなる方であるか、また神の変わることはないご計画(マスタープラン)が何であるかがあかしているのです。ですから、私たちは聖書の歴史をよく学ばなければなりません。

●預言者イザヤは一貫して「立ち返って静かにしていなさい。」というメッセージをユダの民に語り続けました。「立ち返って静かにする」とは、「主に信頼する」ことを意味します。イスラエルの歴史の中で実際に起こった出来事を通して、主に信頼するとはどういうことかを学びたいと思います。

●今回扱う聖書の箇所は、イザヤ書の前半の部分(1～39章)の最後(36～39章)に当たります。それらの章の節を合計すると90節になります。アッシリヤ側に残されている歴史的資料の記録によれば、セナケリブがユダの町



の最も堅固なラキシュを攻略して占拠したことがレリーフとして発掘されています。左の図はそれですが、エルサレムの攻略のためには、ラキシュ以上の規模になったとも言われています。

●すでに北イスラエルの首都サマリヤは陥落し(B.C.722年)、アッシリヤの脅威はユダ王国にも迫って来ました。ユダの46の町々は次々と占拠され(46という数字はアッシリヤの記録によるもの)、ユダの最後の砦であるエルサレムも包囲されてしまいました。「籠の中の鳥」のような危機的状況の中で、ヒゼキヤがいかにもしてその危機から免れることができたのか。その

答えが出るような経緯を、イザヤ書36～39章で記されていることを整理しながら読み解いてみたいと思います。

●ただしこの箇所を学ぶときに注意しなければならないことがあります。それは、旧約聖書が必ずしも時系列の順に書かれているわけではないということです。時系列の全く異なる二つの出来事がピクチャーのように並んで置かれていることもしばしばです。これはヘブル人の思考の特徴です。事柄(出来事)の重要性の度合いによって配置されているのです。今回のテキストであるイザヤ書36～39章で言うならば、36章と37章に記されている工

エルサレムの包囲とそこから奇跡的に救われたという事実が最も重要な事柄です。そこに至った要因として(それぞれ密接なつながりを持っています)の38章と39章が、時系列としてはエルサレムの包囲以前に起こったにもかかわらず、36～37章の重要な事柄(出来事)の後に置かれているのです。ですから私たちは、それらを時系列に置き換えて整理しながら理解する必要があります。そうすることで、流れが見えてきます。以下のチャート、「アッシリアの脅威に絶えずさらされ続けたヒゼキヤ王」はそうした作業によって今回作成したものです。

アッシリアの脅威に絶えずさらされ続けたヒゼキヤ王

アッシリアの王の名前	北イスラエル王国	B.C.	南ユダ王国	預言者	
			ウジヤ王の死、イザヤの召命	イザヤ	
ティグラテ・ピレセル3世 中東の覇権を握る。年毎にその脅威は強まった。	アラムとエフライムの同盟軍がユダを攻撃するが敗北に終わる。		ユダの王 アハズ はアッシリアの支援を頼る 神殿の宝物倉は空となり、祭司・レビ人はリストラされる。	↓	
シャルマヌセル5世	最後の王ホセアは牢獄にサマリヤが包囲される(3年間)	729	ヒゼキヤ(25歳) 即位から第4年目 宗教改革を断行、礼拝の回復、過越の祭り		
サルゴン2世	サマリヤ陥落 多くの者たちがアッシリアに捕囚となる。	722			
セナケリブ ユダの町々(46)を次々に占拠 最大の要塞都市ラキシュも占拠し、そこを拠点とする。		715	ヒゼキヤの治世14年目 アッシリアの王セナケリブの来襲 (1) ①ヒゼキヤ、貢物で撤退を要求 ②ヒゼキヤ、エジプトとバビロンに支援を乞う ③ヒゼキヤ、籠城のために地下水道を建設(全長533m) ④ヒゼキヤの死に至る病いと祈りと奇蹟的回復 ⑤バビロンからの使節団がエルサレムへ		
		701	アッシリアの王セナケリブの来襲 (2) ①將軍ラブ・シャクが エルサレムを包囲する。 ②アッシリア軍18万5千人一夜にして壊滅する。		
エルサレムの攻略に失敗したセナケリブは自分の国へ撤収 二人の息子に暗殺される。		696	ヒゼキヤの息子マナセの即位(12歳)		
エサル・ハドン		686	ヒゼキヤの死		

1. アッシリアの王セナケリブの二度の来襲の危機

●イザヤ書 36～37 章はⅡ列王記 18 章 13 節～20 章 21 節と並行関係になっています。最初の部分は以下のようによく同じです。

36:1 ヒゼキヤ王の第十四年に、アッシリアの王セナケリブが、ユダのすべての城壁のある町々を攻めて、これを取った。

●ところが、次の節からイザヤ書と列王記とは異なっています。Ⅱ列王記 18 章 14～16 節の部分がイザヤ書では全く欠落しているのです。それは以下の部分です。

14 そこでユダの王ヒゼキヤはラキシュのアッシリアの王のところに人をやって、言った。「私は罪を犯しました。私のところから引き揚げてください。あなたが私に課せられるものは何でも負いますから。」そこで、アッシリアの王は銀三百タラントと、金三十タラントを、ユダの王ヒゼキヤに要求した。15 ヒゼキヤは【主】の宮と王宮の宝物倉にある銀を全部渡した。16 そのとき、ヒゼキヤは、ユダの王が金を張りつけた【主】の本堂のとびらと柱から金をはぎ取り、これをアッシリアの王に渡した。

●要するに、イザヤ書 36 章 1 節と 2 節の間には空白があるということです。1 節の後に、列王記ではユダの町々がアッシリアの来襲(侵攻)による深刻な危機的状况に見舞われたことで、ヒゼキヤがその危機から逃れる政治的手段として、莫大な賠償金(貢税)を払うことを条件にアッシリアと講和を得ました。この時のヒゼキヤは決して信仰的とは言えません。この政治的和平は危機の解決とはならず、わずかに問題を先へ引き延ばしたにすぎませんでした。後に、アッシリアの王セナケリブはヒゼキヤとの約束を破り、再びユダに来襲(侵攻)して来ました。そしてエルサレムを包囲したのです。その背景には、ペリシテでも、またユダの側にも徐々に反アッシリアへと傾く動きがあったことは事実で、そのことが「アッシリアの王セナケリブの来襲(2)」に至る結果となったのです。



(セナケリブの想像図)

(1) ラブ・シャケの脅迫のことは

●セナケリブの二度目の来襲(2) では、なんとか戦わずしてエルサレムを陥落させたい思惑がセナケリブにありました。そのために將軍ラブ・シャケをエルサレムに遣わして、ヒゼキヤ側の三人の高官と合って交渉しようとした。そのことがイザヤ書 36 章 2 節以降に記されているのです。

2 アッシリアの王は、ラブ・シャケに大軍をつけて、ラキシュからエルサレムに、ヒゼキヤ王のところへ送った。

ラブ・シャケは布さらしの野への大路にある上の池の水道のそばに立った。

3 そこで、ヒルキヤの子である宮内長官エルヤキム、書記シェブナ、および、アサフの子である参議ヨアブが、彼のもとに出て行った。

●アッシリアの將軍ラブ・シャケはヒゼキヤの 3 名の高官たちを「布さらしの野への大路にある上の池の水道のそば」に呼び出し、アッシリアの王に反逆して、何に抛り頼もうとしているのかと脅します。ヒゼキヤの高官たちはラブ・シャケにアラム語で話すよう求めましたが、彼はエルサレムの城壁にいる兵士たちにも理解できるように意図的にヘブル語で話をしたのです(鍋谷堯爾氏によれば、アラム語とヘブル語の違いは、江戸弁と薩摩弁ほどの違いであると説明していますが、それがどれほどの違いなのか、私には見当が付きません)。

ラブ・シャケの脅迫は続き、「ヒゼキヤが、主は必ずわれわれを救い出してください。この町は決してアッシリアの王の手に渡されることはない、と言って、おまえたちに主を信頼させようとするが、そうはさせない。」と言って、民の心を王であるヒゼキヤから離反させようとしています。そして、もし無条件降伏するならば、いのちと生活は保障すると約束します。ところがこのラブ・シャケに対して、ユダの「人々は黙っており、彼に一言も答えなかった。」とあります。これはヒゼキヤの命令でもあったのですが、王と民がこの危機に際して一枚岩になっていることがすごいことなのです。それはラブ・シャケの脅迫が全く効を奏さなかったことを意味します。

(2) 王と民とのゆるぎない信頼関係

●ヒゼキヤはアッシリヤによるエルサレム包囲という国家最大の危機に際し、どのようにしてそれを乗り越えることができたのでしょうか。そのことを考えることが今回のテーマです。最大の要因として考えられるのは、ラブ・シャケの脅迫と王と民との間に不信感を植え付ける彼の事ばに対して、ユダの「人々は黙っており、彼に一言も答えなかった。」とあるように、そこには**王と民とのゆるぎない信頼関係が見られます。**しかしこの信頼関係は一朝一夕にして築かれたものではありません。ヒゼキヤが王として即位してからのユダの民との長い信頼関係の道のりがあります。

① 霊的領域における改革(Ⅱ歴代誌 29:10)

●ヒゼキヤが25歳で即位したとき、彼が最初に取り組んだことは、父アハズの政治路線を完全に切り替えることでした。具体的には、父アハズによって閉鎖されていた主の宮の扉を開き、ダビデ時代に制定された礼拝を回復することでした。父アハズは反アッシリヤ同盟を結んでいたアラムとエフライムの仲間入りを拒否したために戦いを余儀なくされました。そのときアハズは預言者イザヤの忠告を無視してアッシリヤに援助を求めました。その結果、ユダはアッシリヤによって救われたかのように見えました。しかしそのために払った代償は神殿の宝物倉を空にしてしまっただけでなく、アッシリヤの礼拝のスタイルを持ち込まざるを得ないことになってしまいました。当然ながら、主の宮で仕えていた祭司たちやレビ人たちはリストラされました。

●ところがヒゼキヤが即位すると、偶像礼拝によって閉じられた神殿が再びヒゼキヤによって開かれたのです。彼は徹底した宗教改革を断行し、ダビデ以来、だれもが出来なかった「高きところを取り除いた」のです。こうした霊的な改革を行なうことができるためには、それ相当の霊的エネルギーの備えが必要です。彼は自分の時が来る日まで、前もって十分な備えをしていたと思われる。改革は決して思い付きでできることではありません。想像を越えるほどの十分な「整え」が必要なのです。そして、それができたのは、ひとえにイザヤという優れた預言者の存在があったからです。

② 過越の祭りの執行(Ⅱ歴代誌 30:1)

●ヒゼキヤは、ユダの民だけでなく、すでに国を失って離散している北イスラエルの人々にも呼びかけて、エルサレムで主の例祭である「過越の祭り」を執行しました。これはソロモン以降はじめてのことでした。その祭りは、彼らが神の選民としてのアイデンティティを確認させる意味を持っていました。それを実現したヒゼキヤには霊的なリーダーシップがあったことを意味します。

③ 籠城に備えて、地下に水道のトンネルを造った

●これは国家的プロジェクトでした。水源が城壁の外にあるために、そこを抑えられたならば籠城することは不可能です。「ヒゼキヤのトンネル」とも呼ばれるこのプロジェクトだけでも興味深いのですが、そのためには多くの話をしなければならなくなりますので、今回は割愛することにします。とにかく、すごいプロジェクトなのです。



(3) ヒゼキヤの主に対する「誠実さ」

●今回の聖書箇所(イザヤ書 36~39章)の並行記事であるⅡ歴代誌 32章1節には、ヒゼキヤについてこう記されています。「これらの誠実なことが示されて後」に、アッシリヤのセナケリブが来襲し、ユダに入り、城壁の町々(46)を占拠したということです。「これらの誠実なことが示されて後」とは上記の①~③の事柄です(この他

に城壁の修復なども含まれます)。すでに危機に対する霊的な面と実際的な面の準備はヒゼキヤによって整えられていました。エルサレムの包囲と救出に至る一部始終に、ヒゼキヤの主に対する「誠実さ」が大きくかかわっていたということです。

●ちなみに、この「誠実」と訳されたヘブル語は「エメット」(אֱמֶת)で、神に対する誠実さ、真実、忠実という意味を持っています。これが神に使われると、神が語った約束は必ず実現させることを意味します。ですから、「アーメンの神」なのです。この「誠実」という言葉が人に使われる場合には、「自分に与えられたすべての仕事をみごとに成し遂げる」ことを意味します。「成し遂げる」と訳されるヘブル動詞は「ツァーラハ」(צָלַח)の使役形です。本来、この「ツァーラハ」は主の霊が激しく下ることを意味しますが(士師記 14:6, 19/15:14/ Iサムエル 10:6, 10 等)、これが使役形で使われると、「成し遂げる、成功する、目的を果たす」という意味になります。ヒゼキヤは、彼の上に激しく下った主の霊によって、自分に与えられた王としての使命を成し遂げることができた人と言えます。それがⅡ歴代誌 32 章 1 節のいう「誠実なことを示された」という意味です。ヒゼキヤは何と誠実なすばらしい人ではありませんか。

●ところで、私たちは自分に与えられた賜物を神のために忠実に活かして用いているでしょうか。あるいは、神の時に用いられるために備えて、それを日々磨いているでしょうか。第二、第三のヒゼキヤが生まれることを期待して祈りたいものです。

2. 預言者イザヤとの良いかかわりを与えられたヒゼキヤの幸い

(1) イザヤに助言ととりなしの祈りを求めたヒゼキヤ

●ヒゼキヤは三人の高官たちを通してラブ・シャケのことばを聞かされたとき、主の宮に行きました。それは神の御旨を求めて祈るためです。さらにヒゼキヤは、イザヤのもとに使いを遣わして次のように言わせました。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 37 章 3～4 節

- 3 『きょうは、苦難と、懲らしめと、侮辱の日です。子どもが生まれようとするのに、それを産み出す力がないのです。』
- 4 おそらく、あなたの神、【主】は、ラブ・シャケのことばを聞かれたことでしょう。彼の主君、アッシリアの王が、生ける神をそしめるために彼を遣わしたのです。あなたの神、【主】は、その聞かれたことばを責められますが、あなたはまだいる残りの者のため、祈りをささげてください。』

●「子どもが生まれようとするのに、それを産み出す力がない」というのは、母胎に子を産み出す力がないとき、医者助けを借りないと母子ともに死ぬ危険があったことから、今や危機的な状況にあることをヒゼキヤは訴えて、イザヤの助言と祈りを求めています。それはヒゼキヤがイザヤに対する全幅の信頼を置いていたことの現われです。ヒゼキヤの求めに対するイザヤの答え(イザヤは神のことばを伝えているに過ぎない)は以下の通りです。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 37 章 6～7 節

- 6 イザヤは彼らに言った。「あなたが聞いたあのことば、アッシリアの王の若い者たちがわたしを冒したあのことばを恐れるな。』
- 7 今、わたしは彼のうちに一つの霊を入れる。彼は、あるうわさを聞いて、自分の国に引き揚げる。わたしは、その国で彼を剣で倒す。』

●最後のセナケリブ暗殺の預言は約7年後に成就します。ヒゼキヤにとって最も幸いなことは、彼が幼い時から、神のことばを語るイザヤの指導を受けることができたということです。ヒゼキヤの父アハブ、そしてヒゼキヤの息子マナセもこのすばらしい神の器との良い関係は持てなかったようです。もし、ヒゼキヤにイザヤという有力な教師がいなかったとしたら、おそらく、ヒゼキヤは危機に対する人間的な失策によって国を滅ぼしていたかもしれません。良い霊的指導者にヒゼキヤは巡り会い、良いかかわりを持つことができたことは幸いでした。

(2) ヒゼキヤ自身の祈りに対する神の答えも、イザヤを通して

●ヒゼキヤ自身が主に祈る前に、再度、ラブ・シャケは使者たちをヒゼキヤのところに直接送り、三回目のかなり乱暴な脅迫状を手渡しています(イザヤ 37:8~13)。クシュ(=エチオピア)の王ティルハカの軍の来襲の知らせを聞いて、その前にエルサレムを片付けておこうとの思惑が働いたと思われます。ヒゼキヤはその手紙を主の前に広げて主に「救い」を求めて祈りました。その祈りの中で特に目立つのは、「(ただ)あなただけが神(あるいは、主)です」という表現です(16, 20 節)。これは、神の唯一性、至高性、無比性を意味します。

●この祈りに対して、神はイザヤを通して答えられます。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 37 章 33~35 節

33 それゆえ、アッシリアの王について、【主】はこう仰せられる。彼はこの町に侵入しない。また、ここに矢を放たず、これに盾をもって迫らず、壘を築いてこれを攻めることもない。

34 彼はもと来た道から引き返し、この町には入らない。——【主】の御告げ——

35 わたしはこの町を守って、これを救おう。わたしのために、わたしのしもべダビデのために。

●淡々と記されていますが、何と力強い答えでしょうか。誰が見ても、風前の灯としか思えない状況をひっくり返すような答えです。この答えを正しく信じることができたところに、王と民の信頼関係が一枚岩のようになった要因があります。18万5千人以上の軍勢に包囲されてはいるものの、決してセナケリブの軍勢はエルサレムに侵入することはできない。できないだけでなく、もと来た道から引き返すという神の答え。だれがそれをそのまま信じる事ができたでしょう。しかし神が言われたように、そうなる奇蹟が起こったのです。

イザヤ書 37 章 36~38 節にそれを見ることができます。

36 【主】の使いが出て行って、アッシリアの陣営で、**十八万五千人を打ち殺した。人々が翌朝早く起きて見ると、なんと、彼らはみな、死体となっていた。**

37 アッシリアの王セナケリブは立ち去り、帰ってニネベに住んだ。

38 彼がその神ニスロクの宮で拜んでいたとき、その子のアデラメレクとサルエツエルは、剣で彼を打ち殺し、アララテの地へのがれた。それで彼の子エサル・ハドンが代わって王となった。

●イザヤを通して語られた神の答えは、セナケリブは一切エルサレムに侵入することなく、もと来た道から帰っていくというものでした。どうしてそんなことが可能なのか、どうやってそんなことになるのか、その具体的な説明はありませんでしたが、ヒゼキヤと民たちは主のことばを確信して、ラブ・シャケの脅しのことばにもあわてることなく、じっと静かにしていることができたのです。こうした「ゆとり」は、神のことばを信頼するところからしか来ません。しかも、この主への信頼も一朝一夕にしてできるものではありません。主にある厳しい訓練を通して、主が築かせて下さるのです。主はこれから訪れる危機に際して、信仰をもって対処できるように、予め必要な訓練を与えてくださる方なのです。その良い例が、イザヤ書 38~39 章に記されていることなのです。

3. 主への信頼の訓練を与えられたヒゼキヤ

(1) 死に至る病とその回復を通して

●そもそも「ヒゼキヤ」という名前は、「強くする」という動詞「ハーザク」(חֲזַק)と、「主」という神の固有名詞の「ヤー」(יְהוָה)からなっている名前です。つまり、ヒゼキヤという名前は「神によって強くされる」という意味です。「強くされる」ためには、神の特別な訓練が必要です。ダビデも「主はご自分の聖徒たちを特別に取り扱われる」と告白しています(詩篇 4:3)。

●イザヤ書 38 章に見られるヒゼキヤに対する主の特別な訓練は、彼が死に至る病になり、助かる見込みがないという経験でした。ヒゼキヤのいのちは包囲されたエルサレムと同様、風前の灯であったのです。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 38 章 1～7 節

- 1 そのころ、ヒゼキヤは病気になるまで死にかかっていた。そこへ、アモツの子、預言者イザヤが来て、彼に言った。
「【主】はこう仰せられます。『あなたの家を整理せよ。あなたは死ぬ。直らない。』」
- 2 そこでヒゼキヤは顔を壁に向けて、【主】に祈って、3 言った。「ああ、【主】よ。どうか思い出してください。
私が、まことを尽くし、全き心をもって、あなたの御前に歩み、あなたがよいと見られることを行ってきたことを。」
こうして、ヒゼキヤは大声で泣いた。
- 4 そのとき、イザヤに次のような【主】のことがあった。
- 5 「行って、ヒゼキヤに告げよ。あなたの父ダビデの神、【主】は、こう仰せられます。『わたしはあなたの祈りを聞いた。
あなたの涙も見た。見よ。わたしはあなたの寿命にもう十五年を加えよう。』」
- 6 わたしはアッシリヤの王の手から、あなたとこの町を救い出し、この町を守る。
- 7 これがあなたへの【主】からのしるしです。【主】は約束されたこのことを成就されます。

●ヒゼキヤが経験した死に至る病。それゆえ、イザヤはヒゼキヤのところに行って、「あなたの家を整理せよ。あなたは死ぬ。直らない。」と告げます。なんと辛辣なことばでしょうか。この病気は、ヒゼキヤがアッシリアの王セナケリブに貢物を与えることでエルサレムを攻略しない約束を取り付けたことが、神によってさばかれたとする解釈もあります。確かにそのような解釈も考えられます。しかし主はヒゼキヤに死を宣告することで、彼が神に助けを求めることを通して、神の栄光を現わすことを願っておられたとも考えられます。

●案の定、ヒゼキヤは泣いて「ああ、【主】よ。どうか思い出してください。私が、まことを尽くし、全き心をもって、あなたの御前に歩み、あなたがよいと見られることを行ってきたことを。」と主に祈ります。

祈りの結果、ヒゼキヤの年齢が 15 年延びることになります。チャートを確認してみましょう。彼が死んだ年は B.C.686 年ですから、それから遡ること 15 年前は、ちょうど、まさにアッシリアの軍勢がエルサレムを包囲する直前の出来事だということがわかります。つまり、38 章のヒゼキヤの病が意味する出来事は、「アッシリアの王の手から、あなたとこの町を救い出し、この町を守る」という主の約束を確証させることにつながっていったと解釈できます。

●アッシリアの包囲にも屈することがなかったヒゼキヤの背後に、こうした死に至る病で当然死ぬはずであったヒゼキヤが奇跡的に回復して、さらに 15 年の寿命が加えられるという保障が主によって与えられたからと言えます。ここにも、ヒゼキヤと民が危機の最中になぜ静かにしていられたのか、その秘密が隠されています。

(2) バビロンの使節団が来たときの捕囚の預言

●最後にイザヤ書 39 章に記されている出来事も同様に、ヒゼキヤと民が危機の最中に静かにしていられたその秘密が隠されています。ヒゼキヤと民が危機の最中になぜ静かにしていられたのか、その秘密が隠されています。

●この章は、ヒゼキヤの病気のために見舞いに来たバビロンの使節団に対して、王宮内を案内して回り、もてなしのつもりで、宝物庫から武器庫まで、洗いざらい見せてしまっているヒゼキヤの得意さ加減に「アブナイ」という教訓として解釈していることがあります。果たして、その解釈はここでは妥当な解釈なのでしょうか。

●このことを後で知ったイザヤが、それらの物がすべて、バビロンへ運び去られる日が来ている。何一つ残されない、という主のことばを告げています。さらに、「あなたの生む、あなた自身の息子たちのうち、捕えられてバビロンの王の宮殿で宦官となる者があろう。」とも言っています。しかし、それがヒゼキヤの罪の結果として語られているように思えないのです。ヒゼキヤがバビロンの使節団に見せた物の略奪は、やがてユダがバビロンによって滅ぼされることで実現しますが、その原因がヒゼキヤにあるとは語られてはいないように思われます。なぜなら、ヒゼキヤがイザヤの語ったことばを聞いて何と言ったかに注目するならば、です。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 39 章 8 節

ヒゼキヤはイザヤに言った。「あなたが告げてくれた【主】のことばはありがたい。」彼は、自分が生きている間は、平和で安全だろう、と思ったからである。

●「あなたが告げてくれた【主】のことばはありがたい。」とは、感謝のことばです。イザヤが主のことばとして語ったことばの中に、バビロン捕囚を示唆することがあったとしても、39 章の一番重要な点は、1 節にある「そのころ」ということばです。「そのころ」とは、エルサレムがセナケリブの軍隊によって包囲されたころです。そのころに、ヒゼキヤがイザヤの口を通して聞いた主のことばは、「自分が生きている間は、平和で安全」というものでした。自分の時代に課せられたことは、主のことばを信頼するということです。エルサレムが風前の灯の危機の中にある状況の中で、このエルサレムは主によって守られるという確信です。その確信のゆえに、ヒゼキヤと民は敵の脅しに翻弄されることなく、「静かにしている」ことができたのだと、聖書は主張しているように思えるのです。このことのゆえに、38 章と 39 章の存在は二重に、主に信頼することを呼びかける機会となっているということです。人の罪を確定するためには二人の証人が必要であるように、神の約束を確定させる二重の出来事がヒゼキヤに与えられたのです。

最後に

●詩篇 2 篇の最後に、「幸いなことよ。すべて主に身を避ける人(人は原文では複数形)は。」とあります。「主に身を避ける」とは、「主に信頼する」という意味です。そのような人々は幸いだと評価されています。いつどんな時代の中にあっても変わることのない真実は、主に信頼することのすばらしさです。しかしそれは肉的には相当なリスクを伴う事柄です。それでいて霊的には完璧な保障をもたらすのです。「主に信頼する」とはどういうことか、聖書はさまざまな面からそのことを私たちに教えるだけでなく、実際にそのすばらしさを得るようにと訓練し、導いてくれようとしているのです。

2014.9.28